

平成 22 年 5 月 18 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520249

研究課題名（和文）フロベール文学と19世紀自然科学の潮流

研究課題名（英文）Flaubert's Literature and Sciences of the 19th Century

研究代表者

柏木 加代子 (KASHIWAGI KAYOKO)

京都市立芸術大学・美術学部・教授

研究者番号：10128689

研究成果の概要（和文）：

フロベールの医学知識は『ボヴァリー夫人』の展開に不可欠であった。さらに19世紀医学界が面した諸問題を自然科学の領域に拡大した作品が遺作『ブヴァールとペキュシェ』である。フロベールは、ヨーロッパの自然科学の潮流に即し、それを先取りした文学を創造したのだ。また『聖アントワヌの誘惑』全3版に見る「宇宙」場面の度重なる改訂は、49年版ではデカルトの二元論、56年版ではスピノザの一元論へのフロベールの傾倒を立証するもので、決定稿では、神話に依拠した啓蒙期以前の宗教秩序を、「科学を先取りした芸術」として刷新している。

研究成果の概要（英文）：

The story of *Madame Bovary* is on the basis of Flaubert's medical knowledge. Furthermore, his posthumous work, *Bouvard et Pecuchet* reveals the weakness of the 19th-Century natural science, including medicine. Flaubert, in the course of the quick development of sciences, produces path-breaking literature. The scene of "space" in *La Tentation de Saint Antoine* is revised three times. The 1849 and the 1856 editions illustrate his commitment to Descartes' dualism and Spinoza's monism. In the final version, he regards the mythological religious order before the Enlightenment as "the art predicting sciences".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：仏文学、比較文学、文学論、神経科学、触媒、科学プロセス

1. 研究開始当初の背景

『ブヴァールとペキュシェ』における様々な学問と向き合う主人公たち、ブヴァールとペキュシェの自然科学への挑戦から本研究課題の着想を得た。「フロベールと医学」といった自然科学の一分野の研究は今までに様々な研究が存在する。しかしすべて断片的であって、フロベールの代表作を19世紀自然科学の推移に照合したグローバルな研究は未だなかった。

2. 研究の目的

本研究は、おのおのの分野別の研究ではなく、19世紀を総合的に鳥瞰した、人文学と自然科学のバリアー・フリーな研究である。フロベールの提示する文学は、自然科学が立証した世界より、緻密かつ如実に人間生活の機微を描写している。本研究では、フロベールが提唱した近代小説の歩みを、産業革命以降の科学の進展に重ねて考察する。文学が疎まれ軽視されている今日にあってこそ、自然科学よりも歴史ある「文学」の真価をフロベールの作品創造の過程を介して立証することにある。

3. 研究の方法

研究の準備作業として、18世紀末から19世紀にかけての自然科学関連の文献収集に着手。フランス・パリ国立図書館をはじめ、ラ・サール大学文学部(19世紀ヨーロッパ文学)名誉教授で現在プレイアード版『ボヴァリー夫人』を担当、出版準備中のジャンヌ・

ベム教授(研究代表者のパリ第IV大学における博士論文主査)とフロベール研究の実態と自然科学の発展について共同研究を行った。同時に、ジョン＝ホプキンス大学教授(パリ第8大学名誉教授)、ジャック・ネフス教授(研究代表者のパリ第8大学提出論文主査)、ルアン大学イヴォン・ルクレール教授、パリ東大学ジゼル・セジャンジェ教授との共同研究を実施した。

4. 研究成果

(1) フロベール関係資料の調査と解析

①フロベールの作品が19世紀ヨーロッパ自然科学の潮流に即し、それを先取りした文学であったことは、出世作である『ボヴァリー夫人』(1857年)に描出された膨大な医学知識の分析によって裏打ちされている。つまり、当時の医学界においては、二つの相反する見解、つまり「生氣論」(身体の自然な活動は特別な力、一般的には「生命力(生氣)」と呼ばれ、生氣は物理的法則に反して作用する)と「生体論」(すべての生命は物理学的原因によって完全に説明がつく)が拮抗していた。

②未刊の遺作『ブヴァールとペキュシェ』

(1880年)で、フロベールは、19世紀フランス医学界が面した諸問題を「自然科学の領域」に拡大して科学情報の補充をおこない、本書第3章で自然科学に関する知識を総括し、膨大な科学文献(化学、解剖学、

生理学、骨相学、天文学、博物学、地質学)を文学に巧妙に取り入れた。

科学台頭の舞台であった 19 世紀に、科学者によって自然の中に解放され暗中模索する人間の姿を、フロベールは、人間の中に自然を見る文学者のまなざしで分析し、発展途上の科学を人間性の外部環境としてのありのままに描き出した。「科学と文芸の関係」を科学的側面から緊密にしたビュフォン、哲学者にして医師で政治家ラスパージュ、双方とも科学者であった彼らとは別のベクトルで、フロベールは自らの近代文学の中に科学の未来を予言した。

③フロベール生涯の作品である『聖アントワヌの誘惑』全3版(1849, 1856, 1874)における「宇宙」場面の度重なる改訂が物語るもの、それは、作家自身の精神の記録である。

49 年版に見るロマン主義の影響あらわで、饒舌、多感なデカルトの二元論。推敲を重ねた 56 年版のスピノザの一元論への傾倒。そして、決定稿 74 年への改訂は、1870 年 7 月 19 日にはプロシアと開戦、8 月末にスタンで第 2 帝政が崩壊する政治的にも波瀾万丈の時期であった。1871 年 4 月にフロベールはプロシアに占領されていたクロワッセに戻り、執筆を続ける。自然科学がめざましい発展を遂げる 19 世紀後半にあつて、同時代人であるルナンの「科学による神学の解体」を反面教師として「教化された」フロベールは、紋切り型イメージによる風刺文学である 74 年版『聖アントワヌの誘惑』を完成させることで、神話に依拠した啓蒙期以前の宗教秩序を、ルナンとは異なった「科学的な芸術」に刷新したといえよう。『科学の将来』(1849 年、刊行はフロベール死後の 1890 年)におけるルナンは「芸術と芸術家は、科学と科学者の利益のために消えるであろう」という考えであったが、フロベールが切望したのは、「科学的

な芸術であつて、科学による芸術摂取ではない」のであつた。

以上の研究によって、包括的な視点で、フロベール文学が 19 世紀ヨーロッパ自然科学の潮流に則しつつ、それを遙かに先取りしていたことを確認できた。

(2) 研究成果の国内外での位置づけ

2008 年度はフロベールが『ボヴァリー夫人』のなかで巧妙に描き出した「医学」知識について、パリ東大学教授ジゼル・セジャンジェ氏を中心に開催された研究会に参加し、其の成果である拙論《Les vapeurs d' Emma Bovary et la médecine officielle de l' époque》を *Madame Bovary et les savoirs* (Presses Sorbonne Nouvelle, Paris, 2009 年出版) に投稿した。同時に、学術雑誌『ふらんす』(白水社)紙上に「対訳で楽しむ『ボヴァリー夫人』」のタイトルで、『ボヴァリー夫人』を主に自然科学的観点で分析し、連載(全 6 回)した。

また 2008 年度は日中友好 30 周年にあたり、廈門大学(福建省・中国)文学部教授の陳端端氏の要請で、19 世紀末ヨーロッパ自然科学の台頭と文学という視点での講演「19 世紀フランス文学者(フロベール、モーパッサン)が見た中国と日本」を仏文学、日本語学の学生を対象に行った。

2009 年度には『ブヴァールとペキュシェ』第 3 章に見る 19 世紀自然科学の潮流『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』53 号において、自然科学の各分野を系統的に扱っているとされる第 3 章に巧妙に挿入された当時の自然科学の潮流に関する諸問題を文献と照らし合わせて明確にした。

2010 年には、『聖アントワヌの誘惑』の異本 3 版に見る「宇宙」、『GALLIA (大阪大学フランス語フランス文学会)』XLIX, に巻頭論文を掲載。フロベール文学と自然科学の

潮流を、デカルト、スピノザ、そしてフロベールと同時代で科学信仰の強い哲学者ルナンとの比較によって定義し、本研究課題の総括とした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 17 件)

①柏木加代子、『『聖アントワーヌの誘惑』の異本 3 版に見る「宇宙」 『GALLIA (大阪大学フランス語フランス文学会)』 査読有、XLI X, 2010年、1-12頁。

②柏木加代子、「モーパッサンと極東」『象』 査読無、29 号、2009 年、33-44 頁。

③柏木加代子、「フロベールと東洋」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』 査読無、53 号、2009 年、67-72 頁。

④柏木加代子、『『ブヴァールとペキュシェ』第 3 章に見る 19 世紀自然科学の潮流』『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』 査読有、53 号、2009 年、57-66 頁。

⑤ 柏木加代子、『『ボヴァリー夫人』を読む 6』『ふらんす』白水社、2008 年、3 月号、24-27 頁。

⑥柏木加代子、『『ボヴァリー夫人』を読む 5』同書、2 月号、24-27 頁。

⑦柏木加代子、『『ボヴァリー夫人』を読む 4』同書、1 月号、24-27 頁。

⑧柏木加代子、「エンマ・ボヴァリーの気鬱ぎと当時の医学」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』 査読有、52 号、2008 年、15-23 頁。

⑨柏木加代子、『『ボヴァリー夫人』を読む 3』『ふらんす』12 月号、白水社、2007 年、24-27 頁。

⑩柏木加代子、『『ボヴァリー夫人』を読む 2』同書、11 月号、24-27 頁。

⑪柏木加代子、『『ボヴァリー夫人』を読む 1』同書、10 月号、24-27 頁。

〔学会発表〕(計 2 件)

柏木加代子、「19 世紀フランス文学者 (フロベール、モーパッサン) が見た中国と日本」、廈門大学日中友好 30 周年記念学会、2008 年 11 月 4 日、於、廈門大学外文学院 (福建省・中国)

〔図書〕(計 1 件)

Kayoko Kashiwagi, 《*Les vapeurs d' Emma Bovary et la médecine officielle de l' époque* 》, in *Madame Bovary et les savoirs*, Presses Sorbonne Nouvelle, Paris, 2009, pp. 207-218.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柏木 加代子 (KASHIWAGI KAYOKO)

京都市立芸術大学・美術学部・教授

研究者番号 : 10128689